

「水田」と魚 ～魚のゆりかご水田～

琵琶湖のまわりには こうききゅうせつきじだい 後期旧石器時代（2万6000年前ごろ）には人が暮らしていたといわれています。
じょうもんじだい いせき 縄文時代の遺跡からは琵琶湖の固有種しよくぶつのセタシジミの貝がらやどんぐり、トチ、ヒシなどの植物の実、
フナやナマズなどの魚の骨やイノシシ、シカなどの骨が見つかり、豊かな自然のめぐみに支えられた
人々の暮らしがうかがえます。

その後、人間はより安心して生きていくために、自然の力をうまく活かしながら環境に手を加えて
いくようになりました。やよいじだい 弥生時代になり、琵琶湖のまわりに広がり始めたのが「水田」です。



琵琶湖のまわりには内湖と呼ばれる小さな湖や
ヨシしっちなどが生える湿地が広がっていました。

その湿地に手を加え、お米を作り始めたのです。

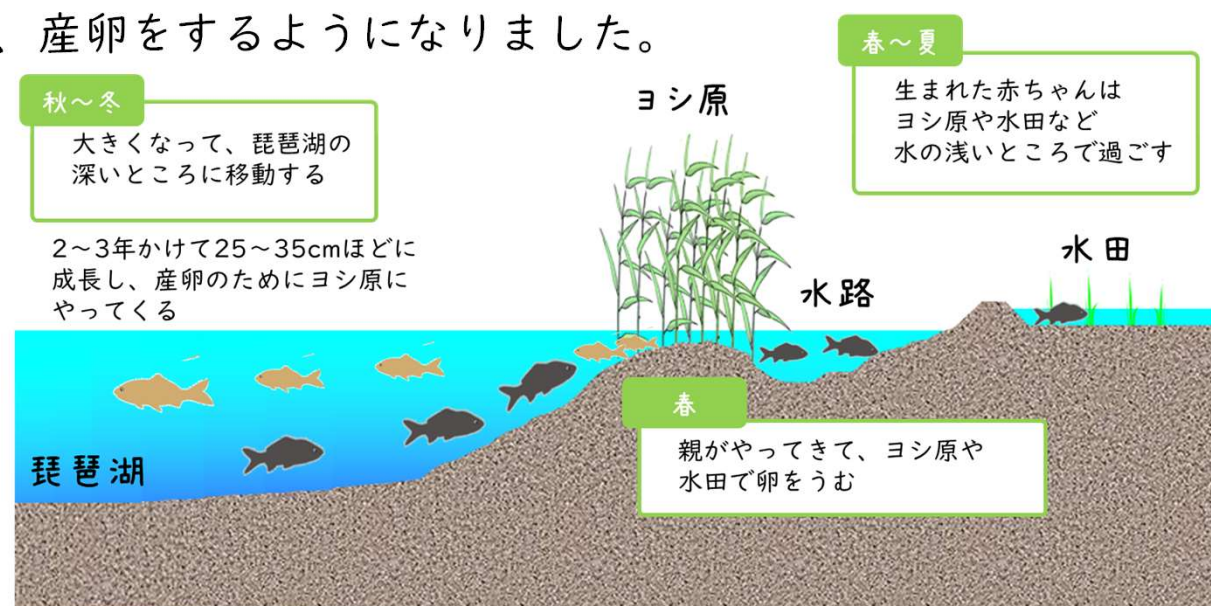


「水田」と魚 ～魚のゆりかご水田～

琵琶湖や内湖の湖岸に広がる^{ないこ}ヨシ原は、5月～6月頃になると雨が降って水位が上昇し、^{じょうしょう}フナやナマズなどたくさんの魚が卵を産みにやってきました。そこに水田が作られるようになり、魚たちはどうなってしまったのでしょうか。

この頃の水田は、琵琶湖や内湖と水路でつながり、魚たちは自由に行き来ができました。水田の中はヨシ原と同じように、^{ちぎよ}稚魚をねらう敵も少なく、エサとなるプランクトンもたくさんいます。魚たちは水路を使って人間が作った「水田」に入り、産卵をするようになりました。

水田は、魚たちが大きくなって琵琶湖に泳ぎだしていくまでの間、安全な環境とたくさんのエサを与えてくれる「ゆりかご」となって、魚たちをはぐくんでいたのです。

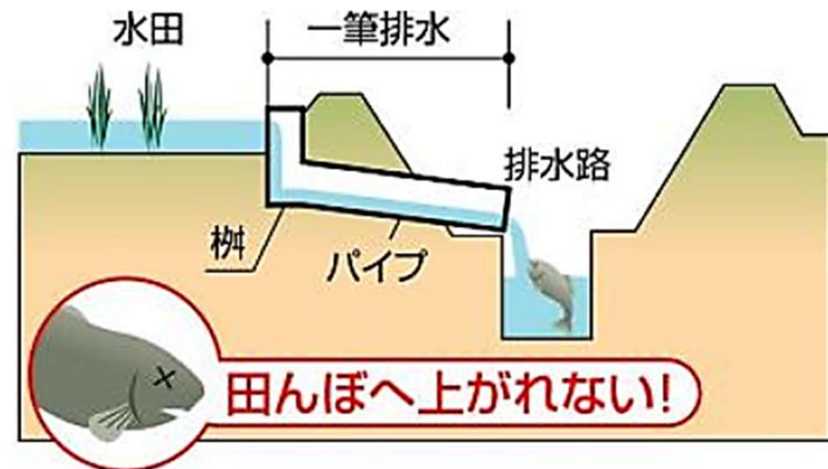


ニゴロブナ的生活史

「水田」と魚 ～魚のゆりかご水田～

しかし人間にとって琵琶湖周辺の水田は、湖の水位が上がれば水につかったり、舟で移動しながら作業をしたりと、大変なことがたくさんありました。

昭和40年頃から経済や技術が大きく発展し、水田はより効率的に作業ができるようには場整備がじょうせいび行われるようになりました。1年中水につかっている水田は作業がしづらいため「乾田化」され、かんでんか排水をよくするために深いコンクリートの水路が掘られました。人間はようやく水害や作業の苦勞はいすいから解放されることができましたが、魚たちは水田にあがることが出来なくなってしまったのです。



滋賀県「魚のゆりかご水田プロジェクト」H.P.より

「水田」と魚 ～魚のゆりかご水田～

滋賀県では今、もう一度「水田」を魚たちのいのちを育む場にできるように、農家と協力して「魚のゆりかご水田」プロジェクトに取り組んでいます。魚たちが産卵の時期に水田に上ってこられるように「魚道」を設置し、無事に魚が水田で育つと、その水田でとれたお米を「魚のゆりかご水田米」として販売することができます。魚道を設置するだけでなく、使う農薬を減らしたり、色々な人に取り組みを知ってもらうために「観察会」をしたり、人にも生き物にも優しい農業を目指して様々な活動が行われています。

